



撮影：西山芳一（表紙、並びに当ページ）、撮影協力：那覇市市民文化財部文化財課



第二次世界大戦時、首里城に日本陸軍司令部が置かれたためアメリカ軍の集中砲火を浴び、玉陵も甚大な被害を受けた。1974年ようやく修復事業が開始、3年余りの歳月をかけて往時の姿を取り戻した。2000年、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録。2018年には、沖縄県の建造物として初の国宝に指定。琉球の建築精神を後世に伝え続ける。

表紙／外庭より中門越しに見た陵墓
上／3棟の墓室が連立する墓域
左／外庭にある玉陵碑。この陵墓に葬られるべきとされた王族9名の名前などが記されている。

玉陵の尊厳と、死者に手向けられた畏敬の念が横溢する、ほぼ一〇〇%の石造建造物。その重量感に圧倒された。

王家の尊厳と、死者に手向けられた畏敬の念が横溢する、ほぼ一〇〇%の石造建造物。その重量感に圧倒された。

玉陵の尊厳と、死者に手向けられた畏敬の念が横溢する、ほぼ一〇〇%の石造建造物。その重量感に圧倒された。

玉陵は、第二尚王統第三代国王の尚眞王が見上森御嶽に埋葬されていた父・尚円王を移葬するために、一五〇一年に築かれた。陵墓は四方約五〇㍍を石垣（石牆）で囲まれている。その石垣に設けられた参詣道の門をくぐり敷地に入ると、白いサンゴ砂利を敷き詰めた外庭に出る。前面には更に石垣と石門があり、その先の祭祀に使われた広い前庭（内庭）に面して三棟の墓室が連立する墓域が東西に広がり、一帯は荘厳な空気に包まれている。

構造自体が琉球の葬制を色濃く反映している。墓室は三つ。中室は遺骸を安置する葬所だ。そこで白骨化した遺骨は洗骨され、石厨子に納められる。東室には王と王妃が、西室には玉陵碑に記されている限られた王族の厨子が安置された。

東室の上部（上写真の左上）は岩盤が原地形のまま露出している。神聖視されていた岩山を掘削し、そこに切石を積み上げるように建造されたことがわかる。

玉陵（たまうどうん）

沖縄県那覇市首里金城町